

誘客をテーマに、第3回「観光力創造塾」を開催！

本年1月22日（木）、橿原市商工経済会館7階大ホールにおいて、第3回「観光力創造塾」を開催しました（主催：南都銀行 協力：南都経済研究所）。テーマは「誘客に秘策あり！」。

ホテル・旅館、レストラン・料理店、土産物店、自治体の観光関連部署、観光協会・地域おこしグループなどの観光関連団体等から、125名の方にご来場いただきました。

第I部 講演

「奈良県のインバウンド戦略」

講師 中西 康博 氏

（奈良県知事公室審議官／観光局次長）

第II部 講演

「奈良の観光についての所感と提言」

講師 岡本 彰夫 氏（春日大社権宮司）

冒頭、南都銀行公務・地域活力創造部の和田悟部長が「県下各地からご参加いただくため、開催場所を橿原市としました」と挨拶。引き続き、講演が始まりました。概要は、以下のとおりです。



和田部長による開会挨拶

第I部 講演（中西 康博 氏）

県で観光を担当して約11年になる。最近は奈良県でも、外国人観光客が増えている。訪日外国人人数は全国で第13位（2013年）。残念ながら外国人宿泊者数は少なく、第23位（同）。旅行上手といわれるフランスやドイツからの宿泊客が多い。伸び率では台湾やマレーシアが大きく増えている。

誘客で注目するのは海外富裕層の購買力。1万5千円～10万円の包丁を買ってくれる。食事にも1万円～2万円かける。一刀彫りも売れている。

観光プロモーション面では、世界各地で活動す

る「観光プロモーター」を4ヵ国に8人配置している。プロモーターと連携し、海外の旅行エージェントからの送客に対して国内で手配を行う「着地商品コーディネーター」も2人配置している。



旧猿沢荘の場所に「外国人観光客交流館」（仮称）を整備する計画がある。ここから飛鳥や吉野方面へワンコインで乗れる「県内ぐるっとバス」のようなものを考えている。

外国人観光客は、夜の9時以降に活動するという特徴があるので、ライトアップや夜のショッピングが楽しめる「おもてなしバス」も検討中だ。

Wi-Fi環境については本年3月末までに、JR奈良駅から奈良公園の主な動線上で、無料・パスワードなしで利用できるよう整備しており、このような広範囲の「面」での取り組みはおそらく全国初だ。

2020年の東京オリンピックまで、訪日外国人客は増え続けるだろうが、その後は減る。だからリピーターを作らないといけない。「またあそこへ行きたい」と、何度も来ていただくことが大切だ。

県では外国語によるガイドブックを作成中である。通訳も養成中だ。「奈良公園観光地域活性化特区」において、特区に限定した通訳案内士を養成している。今年度は中国語・韓国語、2015年

度には英語も加える。

外国人観光客やお店などが困ったとき、外国人や店員に代わって電話で通訳する「多言語コールセンター」は、2013年度は奈良公園限定でスタートしたが、14年度には県内全域に拡大する。外国語で質問があったとき、その場でコールセンターに電話して外国語で用件を聞いてもらう、という仕組みだ。宿泊予約のできる Web サイトの構築も検討している。

インバウンドの窓口は観光プロモーション課（県観光局）。県は「何でも聞きます」「皆さんと一緒に考えましょう」という姿勢なので、ぜひお気軽にご相談いただきたい。

第Ⅱ部 講演（岡本 彰夫 氏）



奈良県の観光は、南北（奈良～飛鳥～吉野）は強いが東西（宇陀郡～北葛城

郡）が弱い。式年造替では、春日大社に来られた参拝客が、そこを出発点にして広く県下を回り、県中南部に宿泊するという流れを作りたい。

奈良の特徴は、社寺の祭礼や法会に断絶がないこと。式年造替、春日祭、おん祭、東大寺二月堂修二会（お水取り）など、断絶なく今日まで続いている。京都は応仁の乱で途絶えている。遣唐使が持ち込んだ唐菓子^{からがし}は、今も当時と同じレシピで作り続けている。神楽、舞楽も然り。

現代は、親の子殺し・子の親殺しなど、殺伐とした時代だ。これは、日本人が誇りを捨てたことが原因だ。誇りを捨てると自信がなくなる、すると正しい判断ができなくなる。自分の村（出身地）を愛し、家族を愛し、母校を愛し、仕事を愛する。それが誇りにつながる。

日本独自の文化は、外国語に訳せない。「たしなむ」というあいまいな言葉は日本独自のものだ。

魚に湿った和紙を載せて上から塩を振る、という「紙塩^{かみじお}」のような微妙な味付けもそうだ。

奈良県は昔から豊かな土地だった。江戸時代、北部は奈良晒^{ざらし}という高級麻織物の特産地で、木津川の舟運を利用して京や大阪へ出荷した。中部は大和木綿を大和川を使って大阪へ運んだ。南部は吉野の木材を吉野川で流した。つまり、ものづくりも流通もあった。幕府は、そんな大和50万石が団結して幕府に反抗することがないようにと、分割統治した。

記紀神話にはたくさん大和が登場するが、記紀に載らない神話もたくさん残る。これらをまとめたのが『かみのみあと～大和の聖地～』という本で、奈良県神社庁から刊行されている。知る人が少ないのが残念だが、県下全市町村が登場する。奈良県神社庁に申し込みれば買うことができるので、ぜひご一読いただきたい。

月刊誌『婦人画報』に、奈良県特集が連載されている。法隆寺のお会式、植村牧場、奈良の工芸、絶景、環濠集落、菓子・料理、川など。大和の郷土菓子の復活にも取り組んでいる。



講演会の全景

当日のアンケートでは「大変勉強になり、ヒントをもらえた」「県内各地域の特色を打ち出し、他府県と差別化を図らなければ」といった声をいただきました。当塾は半年に1回程度開催し、誘客に必要なノウハウを学んでいただく予定です。今後も多くの方のご参加をお待ちしています。

（南都銀行 公務・地域活力創造部 鉄田憲男）